

3. 長勝寺

(1) 歴史

源頼朝が文治元年（1185年）鹿島に隣接するこの地に武運長久を祈願して創建したと伝えられています。臨済宗妙心寺派に属し海雲山と号します。本尊は阿弥陀如来で、銅鐘は国の重要文化財です。北条高時が銅鐘を寄進した名刹の長勝寺も、戦国時代の争乱で衰微、荒廃しました。この寺が復興したのは、江戸幕府が成立し潮来地方が水戸藩領になってからです。慶安元年（1648年）に10石の朱印地が与えられました。

長勝寺が水戸藩との結びつきを深めたのは、2代藩主徳川光圀（義公）の時からです。

貞享2年（1685年）、光圀は水戸の江林寺に招聘していた太嶽祖清を長勝寺の住職に迎え、寺の復興にあたらせました。太嶽祖清は臨済宗妙心寺派の大本山妙心寺253世住職を務め、退隱後に奥州二本松の松岡寺を開山した名僧です。太嶽和尚は法嗣（はっし=弟子）の瑞雲とともに寺の復興に力を尽くしました。又、光圀は藩政の重要な政策の一つとして社寺の改革を実施し、領内で多くの寺院が破却や移寺などの処分を受けましたが、一方で大寺や由緒ある寺院の復興が図されました。長勝寺の復興はその例であります。瑞雲和尚は元禄5年に鐘楼を建立し、同7年には旧仏殿の解体工事に着手しました。老杉（ろうさん）林立する稻荷山を背景にした境内は参道も長く、阿弥陀三尊物を安置する仏殿、山門はともに豊かな禅宗様建築の遺構で禅寺の風格を保ち、また中朱門（ちゅうじやくもん）の中の方丈・書院等も元禄の建物で水戸家ゆかりの宝物を収蔵しています。仏殿は禅宗様建築の特徴を示しており地方寺院としては貴重な遺構です。昭和56年から7年間かけて仏殿・山門保存修理工事（解体・組立工事）が行われました。

(2) 山門

関戸文書「長勝寺物語之事」によれば、藩主徳川光圀の特別の意向により、延方に移築の普門院旧跡に残された山門が元禄13年（1700年）に長勝寺に移築されたものです。

構造様式は三間一戸、二重二階門。上層屋根は入母屋造で、上層、下層とも柿（こけら）葺形の銅板葺。軒の上層には二軒扇垂木（ふたのきおうぎたるき）、下層には軒平行垂木が用いられ、円柱の根元に礎盤、上層の柱間装置に棟唐戸を用

いた禅宗様の建築です。建築年代は定かではありませんが、軒廻りや細部の建築手法を見ると、桃山時代の建物と思われます。昭和56年から7年間かけて行われた解体修理により紅柄塗に復元しました。昭和33年（1958年）3月12日に茨城県指定有形文化財に指定されました。



山門

(3) 仏殿

建立年代は不詳ですが、元禄年間（1688～1704年）に再興されたと推定されています。方7間、一重入母屋造茅葺の建築で、棟上に「笠竜胆」の紋が配されており、身舎の周囲に板葺きの裳階（もこし）があり、内部構造や外部の組物などは禅宗様の手法による建築で中央後方の来迎壁前に高い禪宗様須弥壇（しゅみだん）を設け、背面に突出して脇仏壇があります。内外ともに一段基上に建つ堂々たる禅宗様建築です。

建立年代は詳らかではありませんが、軒廻りその他細部に桃山時代の様式手法が窺われます。

規模雄大な建築で、禅宗様建築として貴重な遺構で山門と同じ昭和33年に茨城県指定有形文化財に指定されました。



仏殿

(4) 銅鐘

元徳2年（1330年）鎌倉幕府14代執權北条高時が下総国府城主千葉五郎禪門道暁との発起により、長勝寺の創建者である源頼朝の菩提のために寄進したものです。鐘銘と序文の中に寺の沿革が記されています。鐘銘と序文の作者は嘉歎元年（1326年）元から来朝した鎌倉円覚寺16世清拙正澄和尚

（大鑑禪師）で、鑄物師は甲斐権守卜部助光です。総高115cm、身高84.8cm、龍頭高24.5cm、口径66.3cm、撞座（つきざ）中心高19.9cmの鋳銅。形状は小型ながら鎌倉期の特徴をよく示し、ま

ことに気品の高い形状をしています。銘文も刻字も優れ、名鐘に恥じないものです。銘文中に「客船夜泊常陸蘇城」の語が記されており、中国蘇州を彷彿させる当時の潮來の繁栄と風光明媚な情景をうかがい知るうえで貴重な資料となっています。

明治44年（1911年）8月9日に国宝に指定されましたが、昭和25年の文化財保護法の施行により国重要文化財の指定を受けました。

【注釈】「客船夜泊常陸蘇城」：潮來は、夜ともなると旅客や積荷を運ぶ船などたくさん停泊して、水郷の景観はいわば“常陸の蘇州”といったところである。



鐘楼・銅鐘

(5) 阿弥陀三尊（木造阿弥陀如来像及び両脇侍像）

像高は中尊阿弥陀如来89.4cm、左脇侍觀世音菩薩107.5cm、右脇侍勢至菩薩106.3cmです。阿弥陀如来は上品上生の印を結び結跏趺坐（けっかふざ）しています。両脇侍像は対照的に両手を上げ下げした立像の菩薩であり、三尊ともヒノキ材、寄木造、漆箔、玉眼嵌入の像です。その作風は整った細かい切付螺髪（らほつ）、薄くなだらかな衣紋線など定朝様をひく旧派の仏師による造形ですが、玉眼を使用すること、阿弥陀如来の面貌や体躯にしっかりした肉取りと張りがあることなど、鎌倉時代風の写実味を加えたものです。觀音、勢至両菩薩像にもこの



法殿内阿弥陀三尊像他仏像

ことがうかがえます。これら三尊の制作年代はほぼ同時期で鎌倉時代中期と思われます。作者は詳らかではありません。昭和33年3月12日茨城県指定文化財となりました。

(6) 方丈・書院・玄関・庫裡・隠寮

木造平屋建で、桟瓦葺で約500m²、東に隠寮（師家または長老の居所）、西に方丈（住職の居所、転じて寺の本堂を指す）、南に庫裡（台所）、北に書院を配した寺院形式の建物です。建立年代は詳らかではありませんが、組物など細部の様式手法により元禄時代中期の建立と考えられます。昭和46年3月29日に茨城県指定文化財となりました。

(7) 禅宗様建築

禅宗様は日本の伝統的な寺院建築の様式の一つ。鎌倉時代後半、武士の帰依を受けた禅宗寺院で取り入れられた様式で、当時の中国建築の直写が目指されました。唐様ともいいます。従来の寺院建築である和様、また鎌倉時代初期にもたらされた大仏様に対する言葉で、大仏様とは共通する部分も多く、あわせて鎌倉新様式または宋様式と総称されます。

禅宗様の特徴（主なもの、一部は大仏様の特徴にも通じる）

- 仏殿は平面正方形で、間仕切りの無い一室堂
- 屋根に強い反り。ただし裳階屋根の反りは小さい
- 放射状に垂木を置く扇垂木。ただし裳階は平行垂木が一般的
- 柱と柱の間にも組物を入れる詰組（つめぐみ）
- 貫（ぬき）を使い構造を強化（長押（なげし）は用いられず）
- 柱は丸柱で上下端をすぼませる粽（ちまき）
- 柱の下にそろばんの玉を大きくしたような形の礎盤を置く
- 窓は上部に複雑な曲線の付いた火灯窓（花頭窓）
- 扇は四周の框（かまち）と縦横の桟を組み、桟と框の間に入子板を嵌め込んだ桟唐戸
- 床は土間床で、瓦の四半敷（目地が縦横の線に対し45度になる敷き方）で仕上げる

(8) 芭蕉句碑

松尾芭蕉 … 江戸時代前期の俳諧師、伊賀国上野（現在の三重県伊賀市）出身、名は忠右衛門のち宗房（むねふさ）、俳号としては初め宗房（そうぼう）を次いで桃青、芭蕉（はせを）と改めました。数度の旅を通して俳諧に高い文芸性を加えた蕉風を確立しました。

貞享4年（1687年）8月、奥の細道の旅に出かける2年前、芭蕉44歳の時、禅の師匠である常陸国鹿島根本寺の先代住職仏頂禪師から、月見の誘いを受け曾良と宗波を伴い鹿島に旅立ちました。この旅の紀行文『鹿島詣』が後に出版され、

『鹿島紀行』ともいわれています。この鹿島紀行の最後に「帰路自準に宿す」としてこの句が掲載されました。

①鹿島紀行自準亭での三吟連句の大意

嶋（ねぐら）せよわら干す宿の友すずめ 松江

この句は松江こと自準（本間道悦）の発句である。芭蕉たちを「友すずめ」と呼びかけ、まずいながらも宿に使って下さいと温かい雰囲気で申し出ている主人の挨拶句です。

秋をこめたるくねのさし杉 桃青

この七七の句は、桃青こと芭蕉の脇句で、主人の挨拶句に対する返礼の句です。「くね」とは関東地方の方言で生垣のこと。

「さし杉」とは挿し木した杉のことです。

「秋をこめたる」の表現には、こんもりと茂っているという意味と、生垣にまで気配りまでして迎え入れてくれた主人の心のこもったもてなしに対する謝辞が表現されています。

発句で自準が自分の宿を「わら干す宿」と表現して卑下したのに対し、脇句では自準の家を見事に育った杉の生垣のある落ち着いた家だと賛美しているのです。

月見んと汐ひきのぼる舟とめて 曾良

この句は、発句、脇句に続く第三句で曾良の句。月見をしようと河口を上って行く舟を呼び止めている句です。第三句は話題を転ずることを本意にするといわれ

るが、この句は確かに宿の句からは転じた内容になっています。

②芭蕉時雨塚

たび人と我名よばれむはつしぐれ はせを

『鹿島詣』の2か月後、亡父三十三回忌の法要に参列するため、伊賀に帰郷した際に創作された作品集『笈の小文』の序文の句です。奥州の也農庵（やふあん）一艸（草）（いっそう）が芭蕉翁百年忌を期して建てたという石碑です。俳聖芭蕉の崇敬者であった一艸はその境涯にあやかりたいと出家時雨坊を名乗り各地を行脚し蕉風の高揚につとめました。



三吟連句碑



時雨塚

(9) 春の桜、秋の紅葉、2月の梅、6月の菩提樹

春の桜

長勝寺の桜は3月下旬から4月上旬に見頃を迎え、茨城県内でも有数の桜の名所です。

秋の紅葉

中朱門前の紅葉も深まる秋の情景を、古刹を舞台に見事に演出する名所となっています。



長勝寺の桜



中朱門前の紅葉

2月の梅

鐘楼横の梅林及び文治梅も禅寺の冬の静寂の中で凜として咲き、一層風趣をそります。

長勝寺は銅鐘の鐘銘により右大将、源頼朝公を開基とするとあります。文治梅は公お手植えの伝説もあり、寺の創建文治元年の年号に因んで文治梅と称されています。

文治梅のそばには、「古乃者那也曾毛加麻久良能鎧乃銘（この花やそも鎌倉の鐘の銘）」の伊能鳳後の句碑があります。句碑は豪快な文字が印象的で、鳳後の弟子たちが文政11年（1828年）に建立したものと考えられています。鳳後は伊能忠敬を生んだ千葉県佐原の伊能家の5代目で、潮來で読み書きを教えていました。伝説の梅の香りと、実在する格調高い鐘銘を前に、鎌倉と寺の歴史に思いをはせた句です。

6月の菩提樹

中国原産の落葉高木。花期は6月頃で淡黄色の花を咲かせます。花柄が分枝して垂れ下がり花序の柄には苞葉を付けます。臨済宗の開祖栄西が中国から持ち帰ったと伝えられます。釈迦は菩提樹の下で悟りを開いたとして知られますが、釈迦の菩提樹は本種ではなくクワ科のインドボダイジュ（印度菩提樹）のことです。中国では熱帯性のインドボダイジュの生育には適さないため葉の形が似ているシナノキ科の本種を菩提樹としたと言われます。

佛教の三大聖樹…無憂樹（生誕の地）、印度菩提樹（悟りの地）、沙羅双樹（入寂の地）



長勝寺の文治梅



菩提樹